

【コメント】

金子 裕之

いわゆる庭園施設としての苑園^{えんゆう}（近年は園林と呼ぶ）は、広大であり、多数の園池に宮殿・楼閣、農・果樹園、動物園、さらに無数の野生動物がいる狩猟場などを備えた複合施設である。

「上林賦」が示すように、漢の上林苑には定期的な狩猟の対象として、珍しい鳥獣（珍獣、奇禽）などが多数いた。

鄭在書報告は、苑園を帝国のミニチュアとし、苑園での定期的な狩猟（畋猟）を神話世界の再現とする。すなわち、畋猟は文明（漢文化）の象徴である黄帝と、野蛮の象徴である蚩尤の戦いであり、黄帝の勝利即ち文明の勝利であるとする。これは畋猟の獲物を先祖の廟に捧げると同時に、新たな戦闘（戦争）に対する軍事訓練の意味がある。

言い換えると、苑園での狩猟は帝国の正統性を再確認する行為であるという。狩猟の神話的意味が鄭報告の通りなら¹、珍獣・奇禽^{ききん}の飼育には、定期的な狩猟とその神話的な意味が籠められた可能性がある。その慣習の一端は、朝鮮半島の百済国や新羅国に伝来したようで、朝鮮の歴史である『三国史記』には、

百済本紀、東城王22年（500）夏5月条「穿池養奇禽」

新羅本紀、文武王14年（674）春2月条「宮内穿池造山。種花草。養珍獣奇獣」

と、王室の苑に奇獣や珍獣を飼育したことがみえる。

園林は日本にも伝来した。7世紀後半には、飛鳥京跡における白錦後苑^{しらにほみその}があり、8世紀初頭の平城宮には松林苑、南苑などがある。前者の飛鳥京跡の園林には新羅など朝鮮半島の影響が強く、後者の平城宮園林には唐の影響が色濃い。しかし、狩猟に関することは例外のようである。

平城宮園林には孔雀や鸚鵡がおり、これが「奇禽」などにあたるのか否か検討の余地はあるが、日本の園林は年中行事の場であり、「狩猟」のことはみえない。

狩猟と密接にかかわる射術に関しては、1月17日に大射、5月5日の騎射がある。ただし、これは的中率を競う競技であり、かつての神話世界における狩猟の名残であろうか。

平城宮苑林に影響を及ぼした唐では、長安城の北に周囲65kmにおよぶ広大な禁苑があり、農事、学芸などとともに狩猟を行うから、狩猟の欠落は日本園林の特徴でもあろう。

その理由は日唐の宇宙観、世界観の違いや、当時盛んであった仏教の殺生禁断に対する姿勢など諸要素が絡んでいると思う。

苑林における狩猟の有無は、日本が唐の律令制度を導入した際に、実情に合わせて行った取捨選択の一例とすることができる。

いずれにしても、このことが都市形態におよぼした影響としては園林の規模がある。平城宮の松林苑は推定で東西約1.8km、南北1.5km以上であり、唐の禁苑に比べて規模が小さい。これは右のことと関わるのであるまいか。

(独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所)

1 白川静は『楚辞』「招魂」をもとに、狩猟には亡き王者の招魂受霊の目的があるという。白川静 1979『初期万葉論』中央公論社、p.108。